書評

オルガ・ラング著
小川修譯

中國の家族と社會 (二)

內田智雄

五月初めの學會に東上の際、この書の(二)を岩波書店から寄贈をうけ、歸洛の車中以來、折にふれて讀みおえた感想を、思い出すまゝに記してみることとする。

この書はもともと大册一卷の書であるが、譯者において便宜上下の二卷に分けられたものである。しかしこの書の上卷が、主として舊時現時の家族の構造や家族關係、家族を圍繞する親族や同族の關係、さらにはそれの社會的經濟的な諸關係などに記述の重心がおかれているのに對して、この下卷は、家族そのものの內部關係、卽ち「夫と妻」・「老人と老婦人」・「子供」などに考察の焦點がおかれており、そしてそれは全體として、變貌していく家族關係、すなわち家族の近代化の胎動に耳をすましてきゝいらんとする女史の熱意と理解とが、廣汎な地域と多

樣な職種と階層とに亘る綿密周到な調査資料となり、それにもとずいて女史の公平かつ洞察にとんだ記述がなされ、そしてかゝる家族の內部關係の考察ののちに、一般的に「中國の青年」とその「友人關係」とに考察が進められているのであつて、それはこの書の「要約と結論」とともに、本書が「中國の家族と社會」と題されるに到つた所以を明らかにするものということができると思う。

この書のもつ著しい特色のひとつは、既に上卷の書評において述べた如く、著者が婦人であるということ、すなわちその女らしい、また女性ならではと思われる問題のとりあげ方とその考察の仕方とは、「夫と妻」の章下における「舊式な妻」・「近代的な妻」・「妾」などの諸項において、また「老人と老婦人」の章での「二〇世紀における青年の叛逆」・「老婦人と息子」・「しゆうとめーよめ」などにおいて、また「子供」の章における「赤ん坊」・「家庭教育」・「親に對する態度」・「他の家族員との關係」・「男兒と女兒」・「妾の子」・「子供の叛逆」などの諸項に亘つて見ることができる。しかし卒直にいつてこの部分の記述は、やゝ機械的平面的に失していて、讀者をして退屈せしめる憾みなしとはしないが、女史の中國の社會や家族の近代化への燃ゆるような愛情は、克明に集められた資料や記述の行間にほとばしり出ていて、讀者の胸を打たずにはおかないものがある。またかゝる中國の家族や社會の近代化の過程や程度を、男

女特に女子の工場勞働者や學生の思想や行動の調査に向けられたことは、極めて當を得たものというべきであつて、とりわけ學生のそれは綿密をきわめたもので、それは過去において中國の革命が、學生の力によつてなしとげられてきたという事實とともに、今後の中國の家族や社會の近代化はもちろんのこと、中國の眞の解放と獨立とが、これら學生の手によつてなしとげられなければ、他にそのにない手がないという女史の期待と確信と愛情とが、然あらしめたものであると考えられる。事實、「中國の青年」の章での「學生」の項は、あきらかに單なる報告書や研究書の域を逸脫した筆致に富んでおり、いまその片鱗を窺い知る意味において、その若干を拔萃してみることとする。

滿洲の占領は全學園を沸きたたせた。學生のデモンストレーションと抗議はしだいに激越となり、それは一九三三年にはついに政府內部に危機をひきおこし、蔣介石總統は一時その地位を去るに至つた。一九三五年の末、日本による華北の完全征服を意味するものに他ならなかつた華北自治政府の創立について交涉が行われていた時、學生の反抗はふたたび燃え上つた。それはまず北京にはじまつてしだいに中國全土にひろがつた。デモとストライキが相次いでおこつた。運動は最初自然發生的であつたが、やがて學生團體と學生救國連合會の指導の下に組織化のコースを進んでいつたのである。

學生はかれらの要求を、地方當局および中央政府に對する多くの決議文・請願書・書簡などの形で表明した。これらの要求のうち最難問は全國的な抗日運動の組織の問題であつた。抗日鬪爭に勝利する條件をつくり、大衆を動員するためには、言論・報道・集會の自由と內亂（中共地區に對する）の終熄とが必要であると學生は主張したのである。

青年は熱と勇氣とをもつて鬪爭に當つた。一九三五年十二月の陰慘な日々を北京で過した人々は、多くは十五歲かせいぜい十六歲ぐらいの痩せて弱々しい少年少女の行列が、薄つぺらな綿入れ服にくるまつて、氷のような風の吹きあれる街頭を行進し、役所の前に何時間も佇ちつくして、要求書を役人に差し出す機會のくるのをまつていた光景を忘れることはできないであろう。

反動的な地方政府は青年たちに向つて警官をさしむけた。警官は皮バンドや消防ホース、しまいにはサーベルで學生に襲いかゝつたが、學生たちは抵抗しなかつた。かれらはたゞこうくりかえしつゞけるのであつた。「おたがいに中國人同志だ、僕らを相手にあばれるのは止めたまえ、日本人と鬪おうじやないか」。はげしい寒氣のためにかゝつた肺炎が、猛烈な打撲をうけて惡化したゝめ監獄病院で十七歲の短い命を失つた郭という名の高校學生の痛ましい話は、北京中にひろまつていつた。この少年の看護に當つた警官までが、臨終の

息の下から、抗戰と國の統一を呼びつゞけたかれの聲に泣いたといわれる。

つゞく一年半の間に、ストライキとデモの數は前より減つたけれども、學生運動はかえつてその勢力と規模を增大した。かれらの運動は、學園内に大きな反響をひきおこした。中國人といわず外國人といわず、教師も雇人も、學内のすべての者が學生たちの目的を理解し同情した。のちには學生は田舍や勞働者街にまで進出して農民と勞働者を味方とし、なおも全中國民衆と政府とによびかけつゞけた。まもなく、この苦闘のむだでなかつたことがあきらかにされた。一九三七年には、抵抗運動は中國全土に擴大し、あらゆる階層の民衆の間にひろがつていつたのである。

この一般の支持をうけた運動が、政府をしてついに抗戰を開始させるに到つた大きな要因をなしたことは疑うべくもない。祖國のこの危機に當つて中國の學生が果した役割は、かれらの祖國のあるかぎり忘れられることはないであろう（一二四―一二六頁）。

女史の中國に寄せる愛情と期待とは、もつとも深く學生の上に傾注せられており、從つてまた調査も綿密で洞察もまた豐であつて、この項をもつてまさに本書の壓卷と稱すべきであろう。

この「中國の青年」につゞく「友人關係」は、古來また現實に、多分に封鎖的なワクの中にとざされていた家族關係や血族關係をつき破るものとして、ないしはこれに代るものとして、換言すれば家族制度の社會化へのひとつの重要な通溝として、そこに友人關係なるもののあることを指摘せんとしたものであり、その着眼はまさに正當であり、從來とかく看過されがちの部面であるだけに、女史の慧眼に敬服するのほかはないが、あげられたデータも考察も、ともに通り一返のものであつて、從來の家族關係や血族關係に食いこんでいく新しい社會關係として、なんら本格的な調査も考察もなされていないといわなければならない。わたくしもまたかつて華北農村の慣行調査において、彼等がおたがいに「朋友」とよびあう言葉のニュアンスと、それにともなうなにがしかの特殊な社會關係とに注目して、この問題を若干調査した經驗をもつのであるが、わたくしの場合、單なる問題意識のみで、この問題が容易に究明しがたいものであることを痛感して、ついに抛棄してしまつた經驗がある。しかしとにかくこの問題は、舊來の中國家族制度の變貌や解體とともに、あるいはそれを促進する因子として、看却し得ない重要性をもつものであると考えられる、もつとも古來中國には、金蘭譜をとりかわしての「血盟兄弟」なる慣習も存在してはいるけれども、それはいうところの家族の社會化ではなくして、むしろそれとは逆に、友人關係の家族化であり、家族制度の擬制であつて、いま問題としている「友人關係」ではない

わけである。

いまひとつは本書に著しい精彩をあたえているものは、女史が中國の古典や、また三國志演義・水滸傳・紅樓夢などに若干の知識を有していられ、そしてそれが適當と思われる個所に、いやみなく引證せられていることで、所詮、中國の在來の家族制度や社會を問題とするかぎり、古典や稗史小說などのもつ比重も、決して過少に評價されてはならないのであつて、これらに對する女史の敎養は、問題の考察にすくなからぬ利便と効果とをもたらしていると確信されるし、また變貌解體の過程にある現時の家族制度の解明や記述に對しては、女史が中國近代の作家の小說に眼をとおしていられることも、同樣な意味においてこの書に精彩をあたえていることも否定し得ないと思う。

次にわたくしが、かつて女史と同じ中國の調査に從事していたという立場から、この書に資料を提供したその調査方法について一言したいと思う。

この書の資料は、かつての女史の夫君ウィットフォーゲル博士の指導のもとに、一九三五年から三七年(昭和一〇―一二年)までに蒐集せられたもので、われわれの華北農村の慣行調査は、一九四〇―四四年に行われたもので、從つて女史の調査の時期とわたくしたちのそれとは、時期的に若干のズレがあるばかりでなく、中國のそのものの政治的經濟的社會的その他の條件にも、甚だしい差異のあつたことは否定しがたいけれども、家族制度の本質的な問題については、いまだ基本的に異るとはいゝ得ない段階にあつたと考えられる。そしてわたくしたちのとつたところの調査方法が、いわゆるボーリング・システムとでもよぶべきもので、それは特定の村落や個々の家族を徹底的に調査することによつて、もつて中國の村落構造や家族制度における普遍妥當的な性格や、もしありとすればその個別性特殊性の究明を企圖したものであるのに對して、女史らのそれは、個別的な調査ももちろん行われたが、より主たる調査方法として、各地各層の人々に質問票を配付して、そのアンケートの集計による大量觀察の方法がとられたのであつて、それはわたくしたちの調査の目的とともに、かなり基本的に異るところのものといわなければならない。かくの如くその調査の目的も、方法も、女史らのそれとは基本的に異るにもかゝわらず、その結論とするところは、殆んど同一であるといつてよいといゝ得るのは、すくなくともわたくしの立場からすれば、その出された質問票が、具體的かつ適切なものであつて、從つてその質問票の作製にあたつては、相當以上の勞苦がはらわれたであろうこと、またその質問票の集計や、それを基調とする一般的な推論の導出にあたつても、細心かつ大膽に、特にきわめて科學的に行われたであろうことが想像せられる。たゞわれわれの調査と基本的に異る點は、アンケートによる調査方法自體が物語つている如く、なんといつても女史らの調査對象が學生や都市の工

場勞働者たちであつて、その比較的な意味においては、若干の知識や教養を身につけている人々であり、また然らざればアンケートへの記入自體が不可能である階層であつたのに對して、わたくしたちのそれは、その九〇パーセント以上が眼に一丁字もないといつてよい農民層であつたということである。もつともわたくしたちは止むを得ない調査の便宜から、村落において最も有識な農民層を對象とせざるを得なかつたけれども、すくなくともわたくしたちのねらいは、極めて一般的な農民たちであつたことはいうまでもない。そしてわたくしたちは、そうした人々の調査の結果からも、また時々に試みた村の青年や壯年の人々の調査からも、女史が剔出されたような強烈な民族意識も、排日的な空氣も、家族生活のもつ矛盾やその批判も、またそれの改善への意慾も、ほとんどこれを見ることができなかつたわけであるが、それは單に女史らの調査の時期が、滿洲事變や日華事變の勃發の直後やその當時であつたとのみはいゝえず、他方また、わたくしたちの調査の粗漏にのみ歸せらるべきでもないと考えられる。それは要するに女史らのそれが、學生や都市の工場勞働者たちであつたということにあるといつてよいと思われる。由來中國人は、その考え方に幅をもつているのと同樣に、中國の社會が、地域によるいくつかの斷層をもつていることも、また上記のようなソゴをもたらした一因であると思われる。

またこの書においては「權威」の問題が、たとえば「親の權威」とか、「學生の親に對する態度」とか、また婦人勞働者や若い勞働者の權威、あるいは權威の「社會哲學的基礎」の問題など、本書の性質上、相當な比重と、從つて相當な紙數を費して論ぜられているけれども、「權威」そのものの內容や、權威そのものの把握の仕方において、かなり概念的な、またきわめて形式的なところがあつて、そしてそれがまた調査の仕方にも記述の方法にも露呈されているように思われる。從つて結果的には、權威そのものの、すなわち家族や社會の民主化や進展をはゞむものとしての權威の實態が、明らかにされていない憾みがあるといわざるを得ない。

なお本書の最後をかざる「要約と結論」の章は、中國の歷史と社會の變化と進步との關聯において、家族制度の變遷や進步のあとを有機的に說明せんと企圖したものと思われるが、記述が概念的に失し明晰でなく、明晰なところはやゝ武斷に失して、要するにこの章はいたゞけないというよりほかにはない。

とにかくこの書を通讀して胸にいきいきと殘されるものは、女史が國家や民族の差異を超えて、社會の繁榮と個人の幸福に對して、きわめて熾烈な理想のにない手であり、中國の學生や青年、ことには、いまなおとけやらぬ因襲と迷忘の中にある女性に對して、深い理解と同情とをよせていられるということであつて、それはもちろん女史その人の人となりにもよるものであ

はあろうが、かつての夫君ウィットフォーゲル博士に負うところも、決してすくなくはないであろうと思われる。

最後に小川修氏の譯文は、まことに流麗そのものであつて、全巻ほとんど飜譯であることを意識させられないでいいのものではあるが、時に專門的な用語に、どうかと思われるものが皆無ではない。たとえば「關羽がまつられている神社」（一八四頁）の加きも、原文の如何にかゝわらず、やはり「關羽のまつられている廟」とか、あるいは單に「關帝廟」とのみすべきであると思われる。（岩波現代叢書・定價二〇〇圓）